自然教育園に関する文献目録

(1) 自然教育園の出版物について

千 羽 晋 示*

Bibliography on the National Park for Nature Study

(1) Publications of the National Park for Nature Study

Shinji Chiba*

1. 序

国立科学博物館付属自然教育園（以下自然教育園という）の生物群集，環境，そして史蹟などに関する文献は，この地の過去から現在に至る経緯をみてもわかるように，きわめて少なく，目にとまらない。

この自然教育園は，東京都港区白金台５丁目21番５号（旧：港区芝白金台町，品川区上大崎長者丸）に位置し，面積約20万m²（約６万坪），地形も海抜16～40mと起伏にとみ，台地，小谷，湧水池，湿地なども残されており，一部地域が公開地域として人為が加わわっているとはいえ，ほとんどの地域が自然植生におおわれたままである。

この地の歴史的な変遷は，古くは白金長者と称する豪族の居住した地と語りつがれ，江戸時代に松平讃岐守の下屋敷があった。

明治維新後は，政府の管理することとなり，陸海軍の火薬庫が構築され，大正６年に皇室の御料地にかわり，第２次大戦後は，国有財産となった。

昭和24年に文部省の所管になり，同年４月12日，天然記念物および史蹟“旧白金御料地”として文化財の指定をうけ，同年11月に一部施設をもうけ公開され，現在にいたっている。

こうした背景から，自然教育園にかかわる種々の記録は，昭和24年以降に集中してみられ，中でも，植物に関しては，開園後30年間の推移を知るための貴重な原資料もあるが，前にものべたように，全般的には少なく，昭和24年以前の状況を推察することは，ほとんど不可能といえる。

今回の報告では，自然教育園が主となって刊行された印刷物をとりあげたが，各論のそれぞれに関しては，次号以降に記したい。

---

* 国立科学博物館付属自然教育園
National Park for Nature Study, National Science Museum

2. 自然教育園出版物について

自然教育園の出版物としては，開園時に発行された自然教育園概説（1949）が最初のものである。

その後，自然教育園産の昆虫類目録（1952），鳥類目録，植物目録（蘚苔・羊歯・種子植物）（1954），軟体動物目録（1953）などのリスト類が自然教育園基礎資料などとしてだされ，一般公募の野鳥が巣箱を利用するようすの観察（1955～1962）が同じシリーズとして出版された。

また，これらと併行して，生態学入門講座テキスト（1953～1962）など各種講座テキスト（1954～），また，入園者の利用のためのパンフレット（1963～：毎月）などが刊行されている。

自然教育園生物群集に関しての本格的な報告は，自然教育園北西部に高速道路が建設されることを機に開始された調査の結果である自然教育園の生物群集に関する報告，第1集（1966）で，その後，第2集(1967)，そして，自然教育園報告（1969～）へとうけつがれている。

一方では，基礎資料のシリーズとして，自然教育園の気象（温度，湿度，雨量），地下水位，風向など（1969～1973）の各年の測定資料がだされていたが，1973年以降は，印刷されていない。

こうしてみると，先にも記したように，生物群集，環境に関しての報告は，1960年代後半からのものが多く，自然教育園以外の各種刊行物にのせられている自然教育園に関係した報文も，同じ傾向を示しているといえる。

歴史に関してのものは，科学博物館百年史（1977）に発表されたものなどが，まとまったものとして最初である。

今回，出版目録の作成に際して，これまでの刊行物は，つぎの4項目に内容的に類別することができる。

(1) 自然教育園の概要・歴史に関する資料

(2) 自然教育園生態系に関する資料

(3) 自然教育園の教育普及活動に関する資料

(4) 自然教育園の基礎資料

この中で，(3)の教育普及活動に関する資料は，例年実施している各種講座等のテキスト，手引きであり，今回は，リストをのせるにとどめるが，他の資料については，若干の内容紹介を記し，内容がわかるよう配りょした。

（1） 自然教育園の概要・歴史に関する資料

(1) 文部省科学教育局（1949）：国立自然教育園概説　42頁・付図1（A5版）　文部省科学教育局

自然教育園としての最初の出版物。開園にあたってのガイドブック的な内容で構成されている。

旧白金御料地略史，旧白金御料地が文部省に移管されるまでの項で沿革などが記され，本園の特徴の中で当時の自然教育園生物群集について，種を中心にした解説がなされている。

また，本園の目標と事業，および，本園を利用する人々のためにの項では，昭和23年の閣議決定にもとずく，自然の保護，自然に関する研究，教育的な利用などを基にした，具体的な施策，規程などが記されている。

付図の白金絵図は，松平讃岐守時代のこの付近の図面である。

(2) 野外自然博物館後援会（1972）：自然教育園　32頁　付図1（A5版）　財団法人野外自然博物館後援会（販売品：150円）

自然教育園生態系の保全，自然に関する教育活動を基盤に編集されたガイドブックである。

自然教育園のもつ意味，自然教育園の歴史の項では，自然の重要性をもとに沿革が記されており，自然教育園の自然，四季の生物の項では，植物群落，動物群集をとりあげ自然のしくみを解説するとともに，四季おりおりの顕著な生物をとりあげ，生態的な解説などがなされている。（また，沼田真監修（1976）：四季の森林，地人書館　はこのガイドブックと同じように，自然教育園の生態系について，多くの記録をもとに書かれており，自然教育園の総合的な理解の手引き書としてよい）

後段の自然保護のための活動と現状，自然教育園の教育活動の項では，各種教材園の解説，教育普及事業，自然保護のための調査研究に関して紹介がなされている。

このガイドブックの特徴は，付図（折りこみ）に植生図・主な観察地点，生物ごよみ（花・鳥・虫）がのせられており，本文と対応した利用が配りょしてあること。

(3)　国立科学博物館（1977）：第７節　国立自然教育園の併合と活動　国立科学博物館百年史　417～428頁（Ｂ５版）　国立科学博物館（各論で記すべき性質のものであるが歴史的な理解を深めるためのものとしてあげておく）

国立科学博物館百年史の中でふれられているもので，国立自然教育園規程，利用規則，建物，工作物などの種目，整備年代などが記されている。

また，具体的な事業名と開始，実施年代も記されているが，主として，国立科学博物館に併合された以後について，その経緯が記されている。坂元他（1977）：“自然教育園”そのむかし　自然科学と博物館　45(1) 35—41頁は，百年史にのべられている以前の歴史を推察するのに役立つものである。

（２）　自然教育園の生態系に関する資料

(1)　自然保護研究会（1963）：自然教育園道路地域生物群集に関する調査報告書　18頁（Ｂ５版）　自然保護研究会

昭和39年に高速道路２号線の工事がおこなわれ，自然教育園の一部が予定地域として計画されたが，本報告は，その際の予定地域の生物群集に関する調査の概略的報告書である。

主として植物群落に関するもので，道路地域の生物群集の種組成ならびに構造，樹木の種類と個体数および大きさ，そして，道路地域の地形と植物群落の関係の３項が記されている。

また，将来自然林を保護するための１項が加えられ，高速道路の建設にあたり留意されるべき事項，将来への推測なども記されている。

(2)　自然保護研究会（1966）：自然教育園の生物群集に関する調査報告　第１集　付図　自然教育園　現存植生図　154頁（Ｂ５版）　財団法人　野外自然博物館後援会

先の報告書（1963）のもととなった調査がその後も継続され，３年後に集大成された第１集である。

内容は３部にわけられ次のように構成されている。

第１部　自然教育園の植生（宮脇昭編）：自然教育園の植生と現存植生図（奥田重俊他）

第２部　自然教育園内植物群落の構造と遷移（沼田真編）：自然教育園内植物群落の組成と構造（沼田真他），自然教育園内のつる植物と群落遷移（延原肇他），自然教育園内の人里植物の分布遷移（小滝一夫他），遷移からみた埋土種子集団の解析Ⅳ　マツ過熟林とスダジイ極相林（予報）（林一六他）

第３部　自然教育園の動物群集（北沢右三編）：自然教育園の動物群集に関する調査について（北沢右三），自然教育園内のモグラについて（今泉吉典他），自然教育園におけるネズミ類について（矢部辰男），自然教育園の鳥類について（鶴田総一郎他），自然教育園内のヒキガエル個体群について（野口惇），森林における落葉の消失と土壌無せき椎動物について（中村方子他），自然教育園の土壌線虫（一戸稔），自然教育園の土壌昆虫（黒佐和義），自然教育園の多足類（篠原圭三郎），自然教育園の林内に生息するアリ（近藤正

樹），自然教育園のショウジョウバエ（岡田豊日），自然教育園の原尾目及び粘管目（今立源太郎），自然教育園の貝類（波部忠重），自然教育園のミミズ（安立綱光他），自然教育園内の池沼の底生動物とプランクトンについて（山岸宏），自然教育園内の池の植物プランクトン（大西一博）

動物の部の多くは，目録でしめられているが，鳥類，ヒキガエル，底生動物，プランクトン，落葉と土壌無せき椎動物などに関しては，生態学的な考察もなされている。

この調査は，都市の残存緑地における生物群集について，総合的に実施されたもので，現在の自然教育園生態系調査のもとになっている。

(3)　自然保護研究会（1968）：自然教育園の生物群集に関する調査報告　第2集　22頁（B 5版）　財団法人野外自然博物館後援会

第1集（1966）の続篇，植物群落の構造と遷移篇に属する2篇がのせられている。

遷移からみた埋土種子集団の解析Ⅴ　マツ過熟林およびスダジイ極相林について（林一六他），林床植物群落の葉量（広井敏男他）

自然保護研究会による報告のシリーズは，以上の3報告で終っているが，調査そのものは現在も継続されてきている。

さらにそれらの調査資料は，その後以下に記す自然教育園報告に随時掲載されている。

(4)　自然教育園報告（Miscellaneous Reports of the National Park for Nature Study）第1号（1969）40頁（B 5版）　国立科学博物館付属自然教育園

自然教育園報告は，生物群集に関することのみではなく，環境に関すること，教育に関することなど，自然教育園で収集された資料を中心として，報告がなされている。

第1号では，次の5篇がおさめられた。

自然教育園の鳥類群集について（千羽晋示），立山室堂地域におけるライチョウのテリトリーについて（鶴田総一郎他），東京都内の残存植生　1（奥田重俊），自然教育園内の微気象について(1)（菅原十一他），国立科学博物館付属自然教育園における入園者実態調査について（鶴田総一郎他）

(5)　同報告　第2号（1970）　23頁（B 5版）

自然教育園のミズキ群落の組成と構造（手塚映男），自然教育園を中心とする東京西南部の植生（奥田重俊），自然教育園内の微気象について(2)（正門附近の気流系の調査結果）（菅原十一他）

(6)　同報告　第3号（1972）　42頁（B 5版）

自然教育園に生育するスダジイ巨木群の現状とその保護について（奥田重俊），自然教育園におけるシジュウカラの繁殖個体数の変動について（中間報告）（桜井信夫他），自然教育園の潜葉虫について（久居宣夫），自然教育園の蝶類について（桜井信夫他），三重県桑名郡多度町におけるツバメの繁殖記録（千羽晋示）

(7)　同報告　第4号（1972）　25頁（B 5版）

自然教育園の微気象について(3)　環境要因の測定（三寺光雄他），自然教育園における設問板による案内について（矢野亮）

(8)　同報告　第5号（1974）　28頁

自然教育園内の池沼および湧水の水質について（久居宣夫他），自然教育園における大気汚染によるアサガオ葉被害および園内主要樹木異常落葉調査（菅原十一），繁殖期におけるシジュウカラとヤマガラについて（桜井信夫）

(9)　同報告　第6号（1975）　35頁（B 5版）

ヒキガエルの生態学的研究(1)個体数の推定　1973—1974年（金森正臣），同（Ⅱ）ヒキガエルの成長（久居宣夫），都市環境下における樹木の健康度（片岡真知子他），自然教育園内の真正蜘蛛類（山川守他）

この報告からはじまったヒキガエルの生態学的研究の一連の調査は，1973年よりヒキガエル生態研究グループによっておこなわれているもので，現在もつづけられている。

⑽　同報告　第7号（1977）　31頁（B 5版）

自然教育園の水収支⑴流出量の解析（三寺光雄他），自然研究路における評価の研究　主として社会教育の立場から（矢野亮），都市林におけるシュロとトウジュロの異常繁殖　1.　種子の散布と定着（萩原信介）

⑾　同報告　第8号（1978）　149頁（B 5版）

自然教育園沿革史（鶴田総一郎他），自然教育園の代表的植生の土壌と水分環境（坂上寛一他），自然教育園の土壌図（平山良治他），自然教育園の蜻蛉の目撃記録（頼惟勤），アカショウビンの食餌物（千羽晋示），自然教育園の鳥類について（千羽晋示），ヒキガエルの生態学的研究（Ⅲ）ヒキガエルの行動（矢野亮），同（Ⅳ）発信器着装による行動軌跡（千羽晋示），同（Ⅴ）繁殖期における出現と気象条件との関係について（久居宣夫他）

9篇の報文中，鶴田他による自然教育園沿革史は，これまで明確でなかった自然教育園の古代の歴史を坂元正典によって30余の文献をもとに明らかにしたものであり，土壌に関する2報文は，1976年度文部省科学研究費の交付により始められ，現在も自然教育園生態系に関する特別調査の中でつづけられているものの一部である。

自然教育園生態系に関する一連の報告書は，以上であるが，このほかに限られた分野，他機関からだされたものなどがある。

⑿　自然教育園（1965）：自然教育園の植物　44頁（B 5版）　国立科学博物館付属自然教育園

自然教育園の植物の特徴，植生のあらまし，興味ある植物の解説が記されているとともに，自然教育園産植物目録（シダ植物47種～亜種，変種含～，裸子植物9種，被子植物765種）がのせられ，月別の花暦も加えられている。

（3）　自然教育園の教育活動に関する資料

自然教育園の教育活動については，奥田重俊（1969），矢野亮（1972・1977）などにその一部が報告されているが，自然教育園（1972）にも記されているように，種々の形態の教育普及事業を実施しており，それぞれにテキスト，資料などの印刷物が付随してだされている。

個々の内容については，ふれないが，各分野別に資料名を列記しておく。

◦設問板による案内：○月の自然教育園（1963～）　毎月　各4頁（A 5版・タイプオフ）

◦生態学講座：生態学入門講座テキスト（B 5版・タイプ印刷）　昭和27年度～昭和36年度(1953～1962)，生態学（入門）講座テキストブック　昭和28年度～昭和31年度（1954～1957），同　昭和40年度～昭和53年度（1965～1978），生態学実験講座テキストブック　昭和28年度～昭和31年度（1954～1957），昭和37年度（1963），昭和40年度～昭和43年度（1966～1969）

◦自然保護研究講座：自然保護研究講座テキストブック（B 5版・タイプ印刷など）　昭和43年度～昭和52年度（1969～1978），自然保護講座（身近かな自然保護入門）　昭和53年度（1979）

◦野外生態実習（B 5版・タイプ印刷）：鳥類個体群の調べ方（1975）　12頁，植物群落の遷移の調べ方（1975）　24頁，ヒキガエルの個体識別と数のかぞえ方（1976）　12頁，野外観察の指導の方法（1976）7頁，鳥のセンサス（1977）　16頁，植物群落の分け方（1977）　11頁，自然観察路の作り方（1977）　5頁，生物による水質の判定法（1977）　14頁，土壌動物の調べ方（1978）　15頁

◦自然観察会：各回毎とも参加者に資料集を配布　6頁以上（リコピー）

◦日曜野外案内：同　1～2頁（B 4～5版）

（4） 自然教育園の基礎資料

基礎資料は，園内産生物群集の目録，記録，観測の原資料などを保存し，将来共利用できるよう配りょすることから印刷，刊行されているもので，各方面に利用されている。

基礎資料としての第1号は，1952年に昆虫目録がだされ，各分野の目録，観察記録，そして，気象関係などの原資料が現在までだされているが，観察記録，気象資料などは，各種の報告に引用され，その利用価値が高い。

(1) 国立自然教育園基礎資料第1号（1952）：国立自然教育園動物目録第1集　昆虫綱　42頁（A 5版）

古川晴男，長谷川仁，奥谷禎一の各氏によって編集されたもので，ガ類は河田党，双翅目は加藤静男，カ類は佐々学，ハエ類は加納六郎，タマムシ類は黒沢良彦の各氏の同定をわずらわせている。

記録種は216科，1,266種がのっており，直翅目（13科51種），嚙翅目（2：3），半翅目（43：172），鱗翅目（36：379），鞘翅目（51：354），膜翅目（16：112），双翅目（37：147）などがみられるが，この時点での未調査の部分も多く，8科にわたって未同定がある。

(2) 同第2号（1954）：国立自然教育園動物目録　第2集　鳥綱　4頁（A 5版）

未発行の黒田長礼監修による A List of Animals in the National Garden for Nature Study, Series 2nd, Aves (Preliminary Report) がもとになって作成されたもので，9目，22科，55種が記載されている。

(3) 同第3号（1954）：国立自然教育園植物目録　第1集　蘚苔植物門，羊歯植物門，種子植物門　27頁（A 5版）

蘚苔植物23科　61種，羊歯植物8科　34種，種子植物のうち裸子植物7科　10種，被子植物109科　691種が記載されている。

この目録中には，栽培植物，帰化植物の別が印されており，自然教育園の開園前の利用状況などもうかがうことができる。

(4) 同第4号（1955）：野鳥が巣箱等を利用するようすの観察記録　第1集　第1回および第2回野鳥保護に関する懸賞募集「観察記録の部」入賞作品集　42頁（B 5版）

巣箱コンクールと称されていた10回にわたる観察記録の第1号で，最終の第10回までが第9号までのシリーズでだされている。

第1集には，第1回，第2回（1952～1953）の入賞作品10篇（ヤマガラ，キビタキ，スズメ，ムクドリ，シジュウカラなどに関するもの）がのせられている。

(5) 同第5号（1955）：国立自然教育園内産にくばえ類について　16頁（B 5版・ガリ版）

岡崎常太郎，加納六郎によるにくばえ科の調査結果である。20種の（内2種名不詳）目録と採集年月日別個体数などの若干の記録が示されている。

(6) 同第6号（1955）：野鳥が巣箱を利用するようすの観察記録　第2集　第3回野鳥保護に関する懸賞募集「観察記録の部」入賞作品集　50頁（B 5版）

第3回の入賞作7篇が（ツバメ，ヤマガラ，シジュウカラなどに関するもの）とりあげられている。

(7) 同第7号（1956）：同第3集第4回応募作品集　108頁（B 5版）

これまでの入賞作品集と異なり，応募作品22都道府県・91点がのせられている。

対象となっている鳥は，8種（シジュウカラ，ヤマガラ，スズメ，ツバメ，ムクドリ，コムクドリ，コゲラ，カワラヒワ）が巣箱との関連で，32種が生態観察としてとりあげられている。

(8) 同第8号（1957）：同第4集　第5回応募作品集　126頁（B 5版）

19都道府県からの104篇がのせられている。

巣箱利用の観察では，シジュウカラ，ヤマガラ，スズメ，コムクドリ，ツバメ，コシアカツバメ，ムクドリ，コガラの８種，生態観察では，ヒバリ，カワセミ，ヨシキリ，ヒクイナ，キセキレイ，モズ，センダイムシクイ，アリスイなど20余種が対象となっており，内容も変化にとんでいる。

(9)　同第９号（1958）：同第５集　第６回応募作品集　111頁　４図版（Ｂ５版）

18都道府県から応募の106篇がのせてある。

巣箱利用の観察では，例年とあまりかわりはないが，生態観察では，フクロウ，サギ，アオジ，カッコウ，オナガ，コジュケイ，カイツブリ，ヒヨドリ，カラス，チドリなどが新しく対象になっている。

(10)　同第10号（1959）：同第６集　第７回応募作品集　110頁　４図版（Ｂ５版）

23都道府県，170篇余がのせられている。

巣箱利用では，ゴジュウカラ，コガラなど８種の鳥が，生態観察では，ホオジロ，タンチョウ，オオルリ，コサメビタキ，ジョウビタキなど20種が対象となっている。

(11)　同第11号（1960）：同第７集　第８回応募作品集　79頁　４図版（Ｂ５版）

18道県から114篇の応募があり，その概要がのせられている。

巣箱利用では，ニュウナイスズメなど８種が，生態観察では，ヨタカ，ノビタキ，エゾビタキ，マガモなど11種が対象となっている。

(12)　同第12号（1961）：同第８集　第９回応募作品集　68頁（Ｂ５版）

21都道府県から応募の112篇がおさめられている。

巣箱利用では，ブッポウソウなど７種が，生態観察では，ノビタキ，ハクセキレイ，カルガモ，タマシギなど14種が対象となっている。

(13)　同第13号（1962）同第９集　第10回応募作品集　112頁（Ｂ５版）

17都道府県から応募した96篇についての報告である。

巣箱利用では，シジュウカラなど６種，生態観察では，エナガ，アオバズク，モズ，マガモなど13種が対象になっている。

すべて600字程度の要約で紹介がなされている。

（同第14号，第15号は，欠号）

(14)　同第16号（1969）：自然教育園の気象（温度・湿度・雨量）　1968年度　13頁（Ｂ５版）以下同じ

温度，湿度は園内６地点，雨量は３地点の記録

(15)　同第17号（1970）：同　1969年度　13頁

(16)　同第18号（1971）：同　1970年度　13頁

(17)　同第19号（1971）：自然教育園の地下水位　1967・1968年度　18頁

園内３地点（井戸の深さ３ｍ，12ｍ，15ｍ）の地下水位の記録

(18)　同第20号（1971）：同　1969・1970年度　24頁

(19)　同第21号（1972）：自然教育園の気象（風向）　1969年度　36頁

(20)　園内３地点の風向の資料

(21)　同第22号（1972）：同　1970年度　36頁

(22)　同第23号（1973）：自然教育園の気象　（気温・湿度・降水量）　1971年度　13頁

(23)　同第24号（1973）：同　1972年度　13頁

基礎資料は，第24号までであるが，温度，湿度，降水量，風向，風速，地下水位などの記録の収集はその後もおこなわれており，原資料として保存されている。

以上は，公刊されたものについて概略を記したものであるが，このほかにも若干の資料がある。

(24) 中西悟堂監修（1950）：国立自然教育園の野鳥　春夏の鳥の部　国立自然教育園教育資料　9頁　付表2（B5版・ガリ版）

(25) 同（1950）：同　冬鳥の部　16頁（B5版・ガリ版）

この資料では，春夏に13種が記され，45種について渡りの類別，自然教育園での出現期などが記されており，冬鳥の部で留鳥10種，秋冬の鳥14種の解説がされてある（詳細は自然教育園報告8号，75～76頁参照）。

(26) 国立自然教育園（1951）：園内に見られる落葉樹の種類　常緑樹の種類　14頁（B5版・ガリ版）

58科，140種のリストで，落葉樹37科，98種，常緑樹21科，42種がのせられ，栽培の区別がなされている。

(27) 同（1951）：本園における冬の植物の観察　24頁　付図1（B5版・ガリ版）

園内における冬の植物の観察のねらい，地点などが具体的にのべられている。

(28) 同（1953）：国立自然教育園内産軟体動物（腹足綱・柄眼目）目録　2頁（B5版・ガリ版）

7科，12種の記載があるが，確認地点などの記録はない。

(29) 黒田長礼監修（1954）：A List of Animals in the National Garden for Nature Study, Series 2nd, Aves (Preliminary Report) 5頁（B5版・ガリ版）

鳥類目録（1954）の基礎となったと思われるもの。22科，55種をあげている（自然教育園報告第8号，75～76頁参照）

(30) 自然教育園（1963）：国立科学博物館付属自然教育園動物目録　10頁（B5版・タイプ）

哺乳類5科，10種（イヌ，ネコ含），鳥類（追加種）16科，24種，は虫類4科，9種，両生類2科，3種，魚類3科，5種，クモ類18科，62種，軟体類7科，12種が記載されている。

自然教育園の動物についての幅広く扱ったものとしては，最初のものである。

(31) 国立科学博物館付属自然教育園（1967）：教材園栽培植物目録　22頁（B5版・ガリ版）

園内の各種教材園（武蔵野植物教材園，路傍植物生態園，水生植物教材園，園内産樹木園）に植栽されている植物，その他実験的に栽培されているものなどの植栽目録。

それぞれの種の植栽場所，昆虫の食草，園芸種などの記載がある。

これまでのことからも知られるように，当時の状況からみて，その多くはガリ版印刷でだされている。

しかし，そのほとんどは，資料として貴重なものであり，自然教育園の過去を推察するに欠くことのできないものである。

このほか，印刷にされないまま残されているものなども多いが，その中でとくに貴重と思われるものを参考にとどめておく。

桜井久一（1952）：国立自然教育園に生育する蘚苔類の調査報告（未印刷）

蘚類13科，43種，苔類4科，9種の記載があり，東京都心でこれほど生育しているのは珍しいことなど，若干の解説がなされている。

国立自然教育園（1950）：国立自然教育園案内図

当時の計画図をおりこんだものであるが，自然の教育的利用などを考りょした原資料と考えてよいものである。

この紹介では，自然教育園が主となって公刊されたものをとりあげて記してきた。しかし，個々の報文をとりあげることになると，その量はかなりのものとなる。

現在，生物群集，環境，歴史などについて個々の文献を整理しているが，短報，記録などこまかい残りの部分については，これから多くの人々のご助力を得なければ不可能である。

短報であれ，記録的なものであれ，自然教育園に関する資料をお持ちの方，ご存知の方々のご教示をお願いしたい。